

グローバル・フェミニズムズ：  
女性によるアクティビズムと学問の比較事例研プロジェクト

地域：日本

話し手：正井禮子  
聞き手：吉浜美恵子

場所：Kobe, Hyogo, Japan

日付：2021年9月28日

ミシガン大学 女性・ジェンダー学研究所  
(University of Michigan Institute for Research on Women and Gender)

住所：1136 Lane Hall Ann Arbor, MI 48109-1290

電話：(734) 764-9537

メールアドレス：[um.gfp@umich.edu](mailto:um.gfp@umich.edu)

ホームページ：<http://www.umich.edu/~glblfem>



## 正井禮子

1992年 NPO 法人「ウィメンズネット・こうべ」設立、現在まで代表理事を務める。同団体は、日本で最初に災害時のジェンダーに基づく暴力に注目した。30年以上にわたり、女性の権利とジェンダーの平等のために活動。2007年に日本初の試みである「『災害と女性』情報ネットワーク」を立ち上げ、2011年に「東日本大震災女性支援ネットワーク」を共同で設立。加藤シズエ賞（2003年）、"Champion of Change Japan Award" 日本大賞（2018年）、ソロプチミスト日本財団「社会ボランティア賞」（2018年）等、数々の賞を受賞。

## 吉浜美恵子

ミシガン大学 社会福祉学大学院教授。社会福祉学博士。社会福祉士。性暴力の防止と女性の安全の促進を研究テーマとしている。夫（恋人）からの暴力調査研究会の共同設立(1991年)、日本初のドメスティック・バイオレンスの実態調査、フォーカスグループ調査を経てドメスティック・バイオレンス被害者支援のサポートグループの立ち上げと共同運営(1998年)、東日本大震災女性支援ネットワークの共同設立(2011年)、災害時の性暴力に関する初の研究調査 (<http://risetogetherjp.org/?p=4879#more-4879>)、被災した女性とともにフォトボイス・プロジェクト (<https://photovoice.home.blog/>) の実施など、日本で長年に渡りアクション・リサーチを行っている。

**Mieko Yoshihama:** 今日はミシガン大学のグローバル・フェミニズムズ・プロジェクトの一環で、正井禮子さん、ウィメンズネット・こうべの代表理事（です）[をインタビューします]。それでは、始めます。よろしくお願いします。

**Reiko Masai:** よろしく申し上げます。

**MY:** 正井さんは長い長い活動の経歴があるんですけど、まず、じゃあ今の仕事を簡単をお願いします。後でゆっくり聞きますので、今の肩書とか仕事をまずお聞きして、その後、どういう軌跡で、どういう経歴を経て、ここに来たかをじっくり聞きたいと思います。どうでしょうか。今のお仕事は一言で言うと何でしょうか。

**RM:** 今は、DV 被害者の女性と子どもの支援を行っています。民間シェルターを運営して、その後の生活再建まで、継続してずっと支援をするという形で、活動をしております。

**MY:** その民間シェルターというのは何年続けていらっしゃるんですか。

**RM:** 17 年目になります。2004 年に開設しています。

**MY:** そのシェルターを開設する前には、また女性の支援をずっとしてたんですよ。

**RM:** はい、それは 1991 年に立ち上げて、女性のための本を出したり、それから 94 年、震災の前の年の 3 月に女たちの家っていうのを、お金を出しあって一軒の家を借りて。そこでは、女性が徹底的に語り合うということだけ、イベントとかじゃなくて、パートナーとか、仕事とか、子育てとか、離婚とか、そういうことをとにかく語り合うということをやっていました。たくさんの女性がそこに来ました。で、ちょうど 3 月に開設して 8 月ごろから、夫からすごい暴力を受けてるという電話が…。全然、私達、その頃、DV という概念も全く、1994 年には持っていませんでした。その時に、電話がどんどん入ってきて、何とかしたいと思って、ちょうど 12 月に 500 円で誰でも泊まれますということを、私たちずっと女のネットワークという会報を毎月出していたので、そこに書いたら、ちょうど当時 240 人くらいの会員がいたんですが、次から次へと会員が駆け込んでくるということがあって、私たちはこういう活動—いわゆる日本で言う駆け込み寺という活動が、私たちの活動にこれからなるのかなって思って、その年を終えた。で、翌年 1 月 22 日が私たちのその年のオープンデーだったんですが、17 日の震災で、その辺りが土地ごと崩れてしまうということがあって、その女たちの家はその後閉鎖するということになりました。

**MY:** そっかー。震災で女たちの家は崩れてしまった。だけど、活動はストップしなかったんですよ。震災の後、1995 年阪神淡路大震災ですよ。1995 年。この震災の女性の状況とか、震災の後の女性への暴力についてお話していただけますか。

**RM:** 私たち、たまたま女たちの家を開設していたことで、女性が暴力を受けているという実態をやっぴり知っていたので、震災後っていうのは、高齢者支援とか子どもの支援、それから障害者・外国人の支援というのはすぐ立ち上がったんですが、私たちのグループも女の人は自分の家のケアとか、子どものケアとかしなくてはいけなかったんで、震災後すぐには動けなくて、2 月の 24 日に私たちは集まったんですね。で、自分たちは女性問題をずっと、勉強会とかを 91 年からやってきた。で、女性の暴力も聞いている。だから、女性の支援ネットワーク

というのがないので、私たちは何をすべきかという時に、やはり、女性支援ネットワークを立ち上げて、被災女性の支援をしよう。で、女性のための電話相談というのと、それから、女性だけで語り合うという中で、自分たちが受けている暴力とか色んなことを女性は、この安心できる場でしか語れないということを実感していたので、女性支援セミナー、それは女性だけに限定したセミナーを、ずっとそれから、心とか、仕事とか、体とか、パートナーとかいうテーマで、ずっとやっていました。それは、女たちの家を開設していたあの一年間があったから、分かったことだと思っています。

MY: そっかー。だから、継続しているんだね、その前の活動が基盤になって、震災っていう大変なことがあったけど、女性のニーズはこうだっていうのも分かったし…。正井さん、女性だけで語り合うことがすごく大事だっていうのが伝わってきました。

それで、今の正井さんがあるのは、そういう活動の積み重ねなのかな。何か大きな出来事とか、やってきて、こういうこと…。

RM: 私は、この間も自分史を語ってくれというのがあって、それですごく気づいたのは、やっぱり私の原点は生育歴にあると思いました。私は非常にひどいDV家庭で育ったんですね。で、父がいわゆる日本で言う明治の男、母が大正時代の女性で、父は母が何かちょっとでも父に反論するようなことがあれば、もう「黙れ！」って、その一言で、母がそれ以上「でも…」とか言うと、暴力がある。そういう家庭で育ちました。私自身は、その頃小学生で、学校では私は比較的勉強もできたので、委員長とかそういうことをやっていて、リーダーシップをとって、全然男女平等は当たり前と思って、教育を受けた世代なんですね。ところが、家庭に帰ると、もう常に父の「黙れ！」の一言に私たちも怯えて何も言えないし、母を守ることもできないし、そういう中で、母は、つまり私をカウンセラーにしちゃったというか。母は戦争でみんな亡くなって、天涯孤独の人だったので、「私に帰る家があったら、私はいつでもこの家を出たい」と言って、常に私に…。よくお風呂に私と母が入ると、風呂で泣くんですね。でも、それを私は、本当に5つ6つからずっと、それをしてきた。……ごめん。

MY: いや。

RM: そのことが…

MY: お風呂でしか泣けなかったんだろうね。

RM: そう。私は、学校ではリーダーシップをとっていた女性だったので、すっごく理不尽だと思ったんです。なぜお嫁さんというだけで、こんなにも押さえつけられるんだろう。その頃、抑圧も支配という言葉も子どもだから分からないんですけど、なぜお嫁さんは常に「黙れ！」と言われて、自分の言いたいことが、言ってはならないのかというのが、すごーく私は理不尽だと思って…。私、すごーく正義感の強い子どもだったんですね。本当に小学校の当時は、「朝鮮人帰れ！」とか、色々そういうことがあった。[そういう]時に、家の中では、それができない。もう本当に、ずっとそれが理不尽だと思い続けて、大きくなったんです。そのことが一つ、家庭の中の問題があったことと、もう一つは、私は就職をするまでは、大学を卒業するまでは、本当に差別とかそういうのは外では私は感じずに来たんですね。割とリーダー的にずっと外ではやれたんですよ。ところが会社に入って、結婚するまでは、すごーく大事にされてかわいがられて、幸せな社員を、会社員として生活をしていたんですが、たまたま夫が大学に二

回入る人で、私と結婚した時、大学の一年生だったんですね。医学部へ行く人だったんです。で、寿退社をするはずが…。寿…分かるかな。

MY: 分かるよー。

RM: 寿退社というものが私の頃は当たり前だった頃に、結婚してもやめなかった。なおかつ、私は二人娘を産んだんですが、子どもを産んでもやめなかった。で、私が最初三ヶ月で育児休暇だった頃は、あまり揉めなかった。一年休暇が取れるようになったので、私は一年休暇を取って、出てきたら、仕事がない、机がない、椅子がない。全くそういう状態が数ヶ月続いたんです。で、私はその頃、なぜか今思い出しても[分からないけれど]、組合にも言わなかった。弁護士にも言わなかった。そういう不当だというようなことが、やっぱり、それをどう対応していいか、誰も教えてくれなかったと言うか…。

MY: そうそうそう、そうだよーね。

RM: 組合はあったんだけど、どうしていいか分からないまま、私は自分の元の机に、男性の私の後輩だった男の子が座っていて、私はその横でお茶を出したり、何にも仕事を与えられなくて、本を読んでいたりして…。そしたら、その彼が、後輩が、「正井さん、長いため息をつくのはやめてください。仕事の士気が落ちる」って言われて、「え？ 私、ため息ついてるんだ」って。「長ーいため息を、あなたは何度もつく」って言われて、「ごめんさーい」って言ったんだけど、気が付かない間に、こう「はあーっ」とか言ってたんですね。そういうことがありました。なおかつ、私は扶養手当を取った。初めてなんですよ、その会社の中で。でも、男の人が結婚して子どもがいて、妻が働いていなかったら、扶養手当を取るのは当たり前なのに、女性の私が取ったことで、ものすごい大騒動になって、それを取るのに8ヶ月くらい、すったもんだが上でありました。でも、取れました。

そしたら、私はその会社の職場で、女性ではトップの収入の人になった。で、それからすごく、いわゆる日本で言う肩たたきがあつて、「まだ夫は卒業しないのか」「もういい加減にやめないか」とか、色々ずっと、そういうのがあつて、32の時に夫が卒業して仕事を得て、なおかつ私の子どもを…、当時、母が子ども供を見てくれていた[その]母が、病気で倒れちゃったんですね。ということがあつて、やめざるを得ないと思って、私は会社を、32かそれぐらい、10年足らずですけど、会社をやめた。

という経緯があつて、その時に、何て女の人が働き続けるということが、どれほどの差別を受けるかっていうのも、すごくそこで強く感じて…。家庭だけの問題だったのが、そういうこともあつて、私は30代の頃から、よく私のノートを色々書いてたんですけど、女の人がもっと自分らしく、それで伸びやかに生きられる社会っていうものを作りたい。それを私のライフワークにしたいっていうことを、ずっと書き続けてきたんですね。だから、私、91年に兵庫県女性センターを作る会っていうのがスタートだったんですけど、その時の出した会報が、女のネットワーク91。91年だったので。で、その下に私たちはウィメンズネット・こうべは女性が自分らしく自由に伸びやかに生きられる社会を目指していますっていうことを、ずっと会報の下に、表紙のところに書き続けてきた。それが私の強い思いですね。

MY: そっかー。だから、ずっとブレてないんだね。その時から。91年から。その前からだけど。正井さんが自分のライフワークとしてしてきたこと、それからビジョンとしてきたことー「こういう社会を作りたい」ーっていうのが、ずーっと貫かれてて、震災の後も、ずっとそれ

を貰ってきたんだけど、震災の後、女性への暴力について声を上げましたよね。その時の反応って、どうだったんですか、当時。これ、1995年ですよ。今からもう26年前です。

RM: 27年になるんじゃないかな。その時に、女性支援ネットワークを立ち上げて、女性のための電話相談にも、DVの相談とか、暴力に関する相談がいっぱい入って…。私の感覚では、相談の本当にほとんどが暴力。夫からの暴力、私とか、どっちかというとならぬ夫からの暴力の相談の方が多かったんですけど、でも、性暴力の話も。私たち、避難所も回っていたので…。例えば、避難所で性被害が起きた。で、県の職員が呼ばれて行った。すると、その代表者である男性が、「加害者も被災者やで。大目に見たらんかい！」と言って、県の職員がもうびっくりした。ということ、県の職員から私が直接に聞いたことがある。

それから、四、五ヶ月経って、女の人が家の片付けとか役所の手続きに行くのに、子どもを…。当時は、もう五ヶ月くらい経っていたから、体育館ではなくて、教室ごとに、三家族から四家族が一緒に暮らしていた。マスコミは「昔からの大家族のように支え合って生きている」と報道していたんですね。でも、実態は、「子ども供を置いて、自分が家の片付けに行き帰ってきたら、子どもが性被害に遭っていた。本当にどうしたらいいだろう」という話を、保健師さんにした。保健師さんが、やはり、「こういうことがあってどうしたらいいだろうか」という風に、私に話があったりした。

で、本当に、そういうことが色々聞いていたので、女性支援セミナーというの、ずっと私、やっていました。その中でも、仮設住宅というのが4月以降できていたので、仮設住宅からやってきた女の人もいた。その人は小さな赤ちゃんを抱いて、「シングルマザーです」とおっしゃいました。「ここは女性ばかりだから、何を言ってもいいですか」って言うから、「どうぞ何でも話してください。安心して話してください」って言ったら、その仮設住宅で、自分はシングルマザーで赤ちゃんもすごい小さいので、なかなか買い物に行けない。仮設住宅が、結構、不便な所に建てられている仮設住宅もあったんですね。で、近所のおじいさんが、彼女が言うには、おじいさんが「わしが一緒に買い物行ってきてやる」って言って、いつも言ってくれて、すごい親切だった。それで、彼女がある晩、夕食に招いた。「いつもありがとうございます」って、夕食をして、「これからもよろしく」って言ったら、「抱かせろ」と言って、性被害にあった…という話をされて…。彼女は淡々と話したんですね。涙もこぼさず、「悔しかった」って一言、言われたんですね。そしたら、ある一緒に話してる女の人が、「あなた、それ、すぐ警察に届けたの？」って、もう割と攻めるみたいな感じで、糾弾するみたいに言われたんですね。そうしたら、その時に初めて彼女が、「そこでしか生きていけない時に、誰にそれを語れと言うんですか」って、その時に初めて涙がつ一つと、一滴流れ落ちた時に、私はそれを見た時に言葉が出なかったんですね。ただ、こんなことが二度とあってはならないし、そういうことが起こらないために、私に何かできることをやろうと、それもすごく思った体験だったんです。

それで、そういうことも色々聞いたりしたので、実は、翌年96年の3月に、「私たちは性暴力を許さない」という集会をして、ちょうど前年の9月に沖縄で、少女の強姦事件がありました。

MY: ありましたねー。

RM: 米兵による。で、その沖縄の強姦救援センター（REIKO）の人を呼び、「被災地—沖縄、女たちの思いをつないで」という「私たちは性暴力を許さない」というタイトルの集会を、女性ばかりで、記者も女性だけ、女性しか入れないという形で開いたんですね。それが、な

翌年の3月まで開かなかったかと言うと、被災地で性暴力について何か語ることが、すごく難しいことだったんです。例えば、そういうことを言うと、その頃、被災地キャラバンというのが、全国を回っていたんです。そこで、東京に、あるキャラバンの人が行った時に、東京で、実は私の友人なんですけど、「被災地で性暴力が起きてると言う話を聞きましたが、本当ですか」って質問をしたら、その時に、ボランティアのような格好をした...、タオルを首に巻いて、まるでボランティアのような格好の人だったということも聞いたことがあったので、そういうことを私が言った。ボランティアがやったとは言っていないんですよ。ボランティアのような格好をした人だったということを書いていたこともあって...。そしたら、被災地のことを報告に来た団体の男性の方が、「俺たちがやったというのか！」ってすごい怒られて、「それは、関東大震災の時の朝鮮人弾圧と一緒に！」って言って、激怒されたらしいんです。で、もう会場の雰囲気がパーッと変わって、友達はいたたまれなくて、会場を出たって言うんですね。

AERA という雑誌も当時ありました。その AERA が「被災地で女性の性暴力が起きている」というのを書いたら、全国から何百通というハガキが来て、抗議の。「被災地を貶めるのか」「被災地にダークなイメージをつけるのか」と言って、もうそういうことが、実はあちこちで聞いていたんですよ、私。だから、この集会をやるのが、やっぱりすごく慎重に...。だから、女性だけで、本当に閉じたところで、落合恵子さんと呼んで、そういう集会をしました。

でも、私1人プラカード四つ作って、「その後デモをするんだ」ってね。「女の No は No だ」とかね、「女も夜、安心して歩きたい」とか...。そしたら、「そんな、誰も歩かないよ」って、実行委員会では、「誰も歩かないよ」と言うから...。でも、私は一応警察の届けも取って、ちょうどその集会場から三宮までずっと商店街を歩くっていうのをやるって、「やりたい！」と言ったら、終わった後、240人、誰も帰らなかったんです。誰一人帰らなくて。で、みんなで「女の No は No だ」とかね、「女も夜、安心して歩きたい」とか口々に言いながら、ずっと行進して...。それは後にも先にも多分、神戸では性暴力に抗議してそれだけの数の女性が歩いたっていうことは、神戸では初めてのことでないかなって思っています。

私はたまたま、その後アメリカへ行った時に、**Get back the night** という女たちのデモがあちこちであったんだよと聞いて、その時に「あ、世界の女の人たちとつながっているんだ」みたいなのが凄く嬉しかったという記憶があります。でも、それでみんな「すごくいい集会だった」【と言って】、そこでいっぱい性被害の体験なんか語られて、今で言うフラワーデモでやってることと同じような...

MY: そうだよー。

RM: みなさんが自分の体験を語ったりした。で、とってもいい雰囲気で終わった...だけれど、それが3月にやって、ちょうど5月に、女の人がいろいろ取材に来られたけど、一週間神戸にいたけれど、レイプの被害にあった当事者の真相を書こうとしたっていうことが書いてあって、でも、「誰一人、そんな被害にあった人はいない。知らないと言った」と...。一週間ですよ。しかも、震災から1年以上も経って、「長田で色々聞いたけど、そんなことはないと言われた」。ということで、全部捏造である、デマである。それは、正井が自分の団体を大きくするために、そういうこと言ったんだという風にして...。もう、私の名前が18回も出てくるのはなぜだろうと思いましたけど...。一回、正井と書いたら後はいいのに、正井は選挙に出て落ちたような女とかね、もう本当に...



MY: 事ある毎に…。個人攻撃ですよ。

RM: すべて否定した。それが出た。すごい私はショックを受けたんですけど、皆が、「そんなの、7月号で出たから、もう8月になったら店頭から消えて、みんな忘れるよ。忘れろ、忘れろ」って言われたんですね、私。ああ、忘れたらいいのか、って。でも、すごいショックだった。でも、まあいいやって思ったら、そのちょうど翌年の1月か2月に、東京の友人が、「あの本が雑誌ジャーナリズムの作品賞を取った。これは、イエローページに与えられるような賞だから、週刊誌の賞だから、気にするなって。でも、あなたが知ったらショックだろうから、あらかじめ伝えておくね」って言って、FAXがパパパパと入ったんですよ。そのFAXを読んだ途端に、私はもう震えが止まらなくて、寒-くなって…。日本中からね、それこそ「お前が悪いんだ」とかね、何か知らないけれども、恐怖でしかなくて、もう本当に震えが止まらなかった。という、そういう経験をして、それから何かみんなの雰囲気も変わって、「あなたが言うから信じたけれど、嘘だったのね」とか本当に言われたんです。それから、私、その時に初めて弁護士のところに行って、小学館だったんですけども、抗議文を出して、出版の差し止めをやりました。やったんだけど、「あなたが最初に雑誌に出た時に抗議しなかったから異議がないものと見なした。だから、あなたが最初に訴えなかったから、これは真実だと思います」って返事が小学館から来たんですね。で、もう一回弁護士のところに行った時に、「あなたが、これで名誉毀損で戦うという方法もある。ただ、名誉棄損の裁判は時間がすごくかかることと、エネルギーがかかることと、得るものがそんなに大きくないと思う」って言われて。「それよりも、あなたが日常の女の人の運動を続けることで、あなたの名誉を回復して行くという、そういう方法もあると思う。その2つ、あなたがどっちを選ぼうとも、私は応援する」っていう風に、まあ、弁護士の人が言われた。すごい人権派の男性の弁護士なんだけど、非常に人権派の弁護士だったんですね。で、私はもうその時、そのことにエネルギーを使うよりは、今、目の前に居る女性たちを支援するようなことに私のエネルギーを使いたいって言って、もう裁判はこれ以上しないという風にしたんですね。そしたら、また裁判をしないということで、物凄い非難されて。「あなたはそんな女の運動をやりながら、泣き寝入りするのか!」「みんな、あなたがどう出るか見ているのに、卑怯だ」とか、そういう女性の…言ったら運動の側から、私は実はすごい批判されました。もう、ちょっと一時、外へ出られなかった。そういうのが来るので。「なぜ戦わないのか」ということで、またすごく批判があったんですね。手紙も来るし、色々あって、まあ、本当に苦しかったです。ただ、その時に私が救われたのは、それこそ、北海道の「おん」の近藤恵子さん、あのシェルターをやってる「おん」の人が、「私たちもそういう経験を持っている。その私が掲載された雑誌から攻撃を受けたことがある。だから、よくわかる。私たちはあなたを信じる」って来たんですね。で、「だから、北海道に来て災害時における性暴行について、あなたは語ってくれ。あなたが語りたくないことを、もう語りたくないだけ語れ」って、そう言うメールが来た。それがすごく嬉しかったことと、それから、性暴力を許さない女の会っていうのが、御堂筋事件という、大阪の地下鉄で、女の人が…、その後、助けた女の子がレイプされるという事件が日本であって、その御堂筋事件で戦った女性たちの会があるんですね。で、性暴力被害者をずっとその後支援し続けている団体が今もあるんですけど、その団体の人たちがお電話をくれて、「あなたが戦いたいと思うなら、私たちはあなたを応援する。でも、あなたがもう疲れて戦いたくない、戦えないというなら、あなたは何もしなくていいです。でも、私たちがあなたのために何が出来るかを考える」って言ってくれたんですね。

まあ、非常に[嬉しかった]。まあ、そういうことを言って、友達の中にも「あなたを信じる」って言ってくれた人もいたし、「あなたのために何が出来るか」と言って...。その当時、朝日新聞とかね、書評欄に「素晴らしい本だ」って、その私を批判した本について、雑誌ジャーナリズム賞を取った時に、「非常に素晴らしい本だ」って...。で、その中に書かれてあるのが、いわゆる人権派の男性や女性の書き手の人が、「災害でいろんなものを失った女性が心が虚しくなって嘘を捏造して有名になろうとしたということを、私たちは責めはしない」ということが書かれてあるんです。

MY: ひどいねー。

RM: そう、子どもの人権をずっとやってる方がそういうことを書かれて、で、「私たちはそういう虚偽を言って有名になろうとした心が虚しくなった女たちがそうしたことを責めはしない」...。なんで心が虚しくなった女がね、性暴力被害があるんですって、それで有名になろうとしたっていう論理が私には全く理解できないんですけど...

MY: それもわかんないし、「責めはしない」って偉そうに言う、そこがわからないね。はっきり言いますと。

RM: そういう論調のがいっぱい書かれてたんですね。もう本当に、それとか、パッと雑誌をめくると、「なんか被災地で性暴力があったなんて馬鹿みたいに信じちゃった。嘘だったのね」って、もう何気ないそういう[言葉が]。読者の欄のところに、「馬鹿な女がいたのね。で、そんな嘘を言った女たちがいたなんて、信じちゃったわ」みたいな。そういう軽い文章にもものすごく傷ついてしまって、私はそれこそ10年間、全くもう...。だって、自分は性暴力について、1件あっても許さないと、言ったことだけで、「100件ありました」とか、そんな風にも言ってないのに、「レイプ多発はデマだった。レイプ多発...、なんか『都市伝説』の作られ方」とか、そんなタイトルだったんだけど、私、性暴力を許さないということが、何でこんなにも叩かれることなのか、やっぱり理解できないので。ものすごく理解できないことは、すごく不安にさせますよね。なんで自分がこんなにも叩かれているのか、理由がわからないというので、本当に10年間も震災に関しては一切語りたくないって、「もう語らない」ということで来たんです。

でも、私は被災地に住んでいるので、毎年あるんですよね。その災害フォーラムとか。で、そこには男性がずらっと1月17日頃に並んで、で、活断層の話とか、震災後の支援の話とか出るんだけど、女性たちがどんなことで辛い思いをし、女性たちがどんな困難を抱えたかっていうのは、性暴力だけでなく何事も語られなかった。女性については誰も何も語らない。で、ちょうどあの震災があった、あの年、95年の7月に、近畿弁護士会が、被災地における人権という大きなシンポジウムも開いたんです。神戸で。私も7月にあったので聞きに行ったら、やっぱり、子どもの人権、高齢者の人権、障害者の人権、外国人の人権とあって、電話帳ぐらいの分厚い報告書がみんなこう配られたんだけど、バーっと見たら、女性の人権は項目にまざらないことと、何か女性について書いていないかと思ったら、「性暴力があったという噂があったが、兵庫県警は1件もない。デマであると否定した」というのが、その弁護士会のその報告書の中にたった一行、それが書かれてあって、私は何か、とっても...女の人っていうのはケアをする役割は担わされるけど、ケアをされる対象にはならないんだなど、その時つくづく、7月に思った。で、そういうこともあって、集会を翌年開いたっていうのもあるんですけど。集会は簡単に有名になりたくて開いたんじゃない。リスクは物凄くあらかじめ思ったけど、で

も、「被害にあった人はきっと誰も語ることができないだろう。こういう中で。そしたら、私たちがそれに声を上げないと、誰があげるだろう」と、当時の私は思ったんですね。ということですが、はい。

MY: だから、まず被害にあったことをなかなか声にあげられないから、じゃあその場を作ろうとして女たちが立ち上がったら、それを封じ込める。すごい社会の力だよ。でも、それだけ女性に語らせたくないっていうのは、やっぱり女性が真実を語ってるからなんだよね。だから、捏造だなんだって言ってるけど、もう、それほど語らせたくない。それほど真実をついてたんだよ。私、正井さんを訪ねて神戸に行ったことがあったじゃない？

RM: 96年、翌年でしたよね。97年かな、なんかそれぐらいかな。でも早い時期でしたよね。

MY: 多分ね。その時、私が覚えているのは、バッシングにあつて、「悔しいよ...。」って言って。さっき正井さんが話した、「仮設で被害にあった人の涙がボローって流れた。それを今でも覚えている」って言われるけど、私が覚えているのは、正井さんの「悔しいよ...。真実を伝えているのに、どうして叩かれなきゃいけないんだ、悔しいよ」。そういう、もう絞り出すような声だった。で、その10年ね、沈黙を強いられたっていうけど、でも、復活して動き出したんだよ。それはどんなきっかけで？

RM: あれはやっぱりね、スマトラ沖地震がちょうど2004年の12月にありましたよね。で、その時に、本当に小さなね、あの記事は確かね、2005年の1月のあのコロンボ発というね、本当に小さな記事だったんだけど、社会面に、スマトラ沖地震で避難所で女性たちが性被害に遭っている[という記事があった]。で、12月に[その事件が]あつて、もう1月には調査を、女性団体5団体がザーッとしたら、2000人を超す収容所で、避難所責任者によって、すごいセクハラがどこでも頻発している[ということが判明した]。で、女性たちが、国に、女性問題省って書いてあつたけど、そこに「女性のプライバシーを守れ」、それから「運営に女性を参画させよ」と声を上げた。

でも、国の方は「この大混乱の中でそんなことはできない」と、取り扱わなかったっていう、ちっちゃい記事だったのね。それ見た時にね、おんなじことが、あつ、私が避難所でね、責任者が「加害者も被災者やでー！」って言うのはすごい、私ショックだったから、「あつ、やっぱり海外でもこういう事が避難所で起きてて、なおかつ、彼女たちはそれを素早く調査をして、そして、国に言っていた。すごいな」って、私は思ったんですね。で、今度、その後2月の大きな新聞記事に、北京+10がニューヨークで開かれた。そこで、スマトラ沖地震の女性たちが報告書を持ってきて、「被災地や紛争地における女性の暴力はもう緊急課題だ」というのがバーンと新聞に大きく載ったんですね。報告書として。それを見て...

MY: ごめんね、国連の女性の...。北京会議が1995年だから、2005年の国連の女性の地位委員会だね。そこに、もう発表していたわけね。

RM: そう、そういうのがあつて、それで私なんか国に言っただけでも凄いと思つてた程度なのに、彼女たちはそこでめげずに今度はニューヨークまで行ったんだということに、私はその迅速な動きとめげない行動力に、すごく感動したんですね。で、すごくエンパワーメントされた。で、私、その自分の周りにいた女の...、実はね、男性に言ったんですけどね。男性の災害関連の人に言ったら、「あなたは、また叩かれる」と。知ってるんです。みんな男性達も知っ

てたんです。「あなたは、またそういうこと、性暴力とか言うと、叩かれるから、自分達は毎年大きな災害のフォーラムをやっている。その中の分科会のさらに小さい分科会であなたがしゃべればいい。守ってあげる」って言われたんです。それで、[そういう]有名な方達に言ったら、そうなって。でも、私、「守ってもらわなくていい。女だけでボーンと『災害と女性』というシンポジウムをやりたい」と思って。神戸の後も新潟とか色々あった。だから、これまでの災害を女性の視点から検証するっていうね。

そういうシンポジウムを女性だけで開こうって言ったら、みんなすごい協力してくれて、それで、その2005年の11月。だから、2月ごろにやろうって言って、11月に、10年目で、

「災害と女性、防災復興に女性の参画」というタイトルでシンポジウムをしました。それですごくやっぱり流れが変わりました。それに参加した人たちが、やっぱり、要するに、その性暴力云々だけじゃなくて、災害を女性の視点から見るっていうことが、そのシンポジウムから変わったような気がしますね。で、国連もちょうど同じ年に、神戸で多分、防災の国連の会議があったんですね。あったけど、私全然そんな

MY: 世界会議だね。

RM: そう、世界会議あったけど、全然呼ばれもしないし、何も関係ないから、あまり知らなかった。あとで知ったんだけど、小泉首相が「これからはジェンダーの視点を災害に入れて行きます」ということをそこで言ったということもあって。

MY: そうだ、そうだ。それで、やっぱり世界の潮流が、こうだんだんだんだん後押しをしたよね。

RM: はい、そうなんです。それから2005年の11月にシンポジウムをして...

MY: だよなー。

RM: で、その時にホームページも立ち上げたんですね、私は。Gender disasterという言葉、そこだけ英語にして、あとは全部、こう...。で、『女たちが語る大震災』という本を震災後の96年に出してたんで、それを全部、英字新聞朝日 Daily Newsの記者松本さんが協力してくれて、全部、全国の女性たちが翻訳してくれて、英文にしたもの。そういうものを全部載せた、「災害と女性情報ネットワーク」かなんか、忘れちゃったけど、そのホームページを作った。で、実はそのことが2011年に東北で大きなことがあった時に、gender disasterというのが、それを目掛けて、スウェーデンやらいろんなところから「女性を支援したい」というのが入っていった。スウェーデンなんか、「人身売買が起こってませんか?」とかね。それは人身売買をやっているところへ流すとか。ハイチだったかな、ハイチでいろいろ女性を支援したアメリカ女性法律家協会というところが、なんか「女性を支援するために法律面で応援するから行きますよ」とか、いろいろ。たったgender disasterという、それだけで、バーっとメールがきて、すごいと思って....

MY: いや、「たった」って言うけど、ホームページには、いろんな文とか色々情報がずっとあったじゃない。

RM: あるけど、日本語だったじゃないですか。

MY: まあ、そうだね。でも、正井さんのところしかなかったんだもん。その当時、gender と disaster という視点で動いてた[団体は]なかったんだもん。ね、それだけ画期的だったんだよね。そして、そこに、ある日、オックスファムからも支援しますよって、あの...

RM: それは、災害の後すぐに吉浜さんから、もう本当に直後ぐらいですよ、吉浜さんから電話があって、「正井さん、今度こそ流言飛語と言われたい、そういう調査をやろうよ」って言ってこられて、「あ、やりたいな」と思ったんですけど、東北は遠いし、お金かかるし、「やりたいな」という思いだったんです。本当にそれとすぐぐらいに、オックスファム・ジャパンの高橋さんから、「ウィメンズネット・こうべで何かやりたいことがあれば、オックスファムは応援する」って電話が入ったんですね。で、「私、暴力調査やりたいです」って[言った]。で、そしたら、「それは何のためにあんたはやりたいのか？」[って言われて]、「もちろん、それを調査して政策提言にあげたいんです」って言ったら、そしたら彼女が、「それだったら、ウィメンズネット・こうべー団体じゃなくて、いろんなネットワークを作って、そのネットワークでもって、国に行った方がずっと効果がある」って言われたんですね。

で、それこそ、その時、高橋さんに「あなたは今までどんなことをやってきたのか」とちょっと聞いたら、「ユーゴスラビアでコソボの紛争が起きた時にユーゴにいて、自分は直接女性の支援は行わなかったけれど、まず女性のネットワークを形成することを自分はやって、それでもって、女性たちが運動することを支えた」と言われて、「すごい、この人すごいな」と思って。で、「私はやりたい」って。で、「人はいるのか」って言うから、「あ、ミシガン大の吉浜さんという人が『やりたい。一緒にやろう』って、さっき、電話を先日くれたんです」って言ったら、「わかりました。じゃあ、調査の方はまた考えていきましょう」とか言われて、それこそ 1500 万、3 年間出してくださったから、活動の一部として、調査がね、費用的にはできたということがあります。だから、あなたが本当にいち早く電話をくださったことは、すごく大きかった。「あ、そうだ」と私も思ったし...。それがね、今回の NHK の報道にも本当に繋がったし、調査報告があるから上を説得できたって。あの調査報告を軸にあの番組を作ることができて...。NHK の番組の反響凄かったのも、あれがまたすごく、日本の災害に関する女性の問題を変えたと思いますね。

MY: そうだね。熊本の地震の後も、女性センターがやっぱり調査報告を見て、それにハイライトがついて、ここがポイントだって言って対応したって聞いているから、やっぱり、調査だけの力じゃなくて、調査をすること、データを集めることによって説得力をもって政策に持って行くって...。

RM: 大きいと思いました。

MY: だけど、調査は難航したよね？

RM: そうですね。調査をすること自体が、あの...。私はね、宮城県に「調査をしたい」って言ったら、「現場は全部地元の人に運営を任せているから、県からそんな指示はできない」って。だから、「やりたかったら自分でやれ」って言われて、いくつもの複数の避難所にお電話をかけたけれども、全部男性のリーダーが出て来られて、で、「被災者を調査対象にするのか!？」って言われて。で、本当にどこでも激しい拒否にあって、本当に避難所に入ることができなかった。

MY: だから、やっぱり真実を暴こうとすると、すごい壁が襲ってくる。絶対語らせない。語ったらバッシングに合うしね。まず語らせない。プライバシーの問題だとか、いろんな理由つけて、女性が自分のことを語れない。で、語っても、語ったとしても信じてもらえない。その構造というのは全く変わらないね。

RM: そう。だから、私、よく災害の話で、阪神大震災と...16年後に行きましたよね、東北に。で、変わったことっていうのは、確かにその10年、16年の間に女性のDVムーブメントはあったので、まあDVのことを相談に乗りますとかね、性暴力についても何かあったらご相談くださいという張り紙はしてあったんです。そのことは違った。でも、組織運営がほぼ全員男性だった。私が行った避難所がね。その構造が変わらない限り、本当に女性が声を上げられない、本当にそう思いましたね。

だから私、東北に行った時に、「そこでしか生きていけない時に誰に語れるというのか」というのは、本当にそうだと思う。で、東北でもレイプの被害があって、加害者も被害者も警察に呼ばれて事情聴取を受けた後、同じ避難所にその2人が返されたというのを聞いています。だから、私はその提言の中に、安全な相談窓口とともに、もし当事者が望むなら、本人とかその家族が別の安全な住まいを提供される。その制度を作って、それを周知徹底させないと、誰も声を上げることはできないという風に提言をしたんですけれどね。なかなか、その後の回答っていうのが得られてないというのが、非常に残念ですね。はい。

MY: だから、災害っていうのは、災害前のね、人権の欠如とか、(社会的)風土が、こうもっと拡大するじゃない。で、今回のコロナ、コロナ禍も、ある意味で災害だよ。非常に[違う]けど。女性を取りまく状況っていうのはどうですか？ 正井さんから見て、コロナ禍の。

RM: あのね、本当にうちが...、4月から8月くらい、今年ですよ、4月から8月までが、ほぼ200%から300%の割合で相談も増え、それからシェルターに入りたいという希望者も増えています。で、うちは2019年から居住支援法人と言って、シングルマザーとか離婚を考えている女性の家探しのお手伝いします。無料で、保証人がいないとか、所持金が少ない人の相談に乗りますって。

MY: そうか、日本ってそこがネックなんだよね。

RM: そこで、チラシを作って。で、一応、居住支援法人の資格があるので、県の資格を取ったので、あちこちにチラシを置いてくれるんですね。そしたら、本当に深刻なDVの人が、「どこにも今まで相談に行かなかった。相談しても、きっとあまり事態は変わらないと思った。でも、この『一緒に同行支援します。無料』って書いてあるので、こんな支援が欲しかった」と言って、本当にたくさん来られるんですね。だけど、その人たちが保証人がいないっていうようなことで、家がなかなか貸してもらわない。で、私たちが借りようとしたんです。なんとか自分たちでお金を集めて、助成金を取って。そしたら、「ウィメンズのホームページを見ました。あなたたちは不特定の女の人を保護している活動をしているみたいですね。そういうところには貸せません」と言って、いわゆる日本の大きな保証協会から全部拒否されて、私たちは本当に法人として家を借りることができないでいるんですね。みんな家があったら、もっと早くに暴力から逃れることができるのに、「実家に帰れ」と言われる。

でも、実家を知らない夫って、いないんですよね。だから本当に、日本の女の人に対して、「暴力があったら保護しましょう」って[言うけど]、その保護された後の支援が本当に乏しいんです。で、それこそイギリスなんかはね、私、94年のイギリスで女の人が暴力を受けて警察にSOSを出すと、住居が与えられるんですね。で、それが何で出来たんだろうと思ったら、ホームレス法が日本は路上生活者のみなんです。ホームレスには、日本もやっと家を与えられるようになった。でも海外は、路上生活者プラス家の中が安全とか...、暴力があったり、虐待があったり、DVがあったりして、家の中が安全でない人たちはホームレスとみなされて住居が提供されるんですね。そういうのからして、もう全然違うっていう....。

MY: 発想が違うと言えば言うけど、でもね、日本国憲法ってさ、基本的人権の保証が根幹じゃない。これ、住居って基本的人権なんだよね。

RM: ええ、本当に。だから、なんて言うのかな、私よく言うんだけど、120位っていうのがね、「ジェンダーギャップ指数121位」って言っても、多くの方は「その数字が何なんだろう？何の意味なんだろう」って言うんだけど、119位はアンゴラ共和国といって、ルアンダが首都なんだよって。121位はシエラレオネといって、ものすごい紛争のある国。その間に日本は120位でいるんだよ。アフリカのそのすごい紛争のある国。当然、人権が侵害されて、最も女性の人権がたぶん侵害されている、その人権侵害の中でも。その間に120位で日本はいるんだよ。と、まあ、言ってるんですけど。なんて言うのかな？なかなか、女性が...、あの、こういうことは分断されているようで、こういうことに凄く一生懸命何とかしたいと思う女たちも日本にはいるんですけど、なんだか、こう、あまりそういうことに興味が無いとかね、日本はまだなかなか行政に対して意見を言っていくとか[が難しい]。

私、よく「正井さんって社会を変えることが、すごい...、その変えたいという思いが強い人なのね」とよく言われるんだけど、シェルターとかそういうので一生懸命やってくれる人はすごく本当に優しく、シェルターのことをやってくれる人はおられるんですね。だけど、そのシェルターで見た課題を、行政の政策提言にもっていくという、その「社会とつなげる」っていうのが、まだまだ人が足りないような気がしていますし、それをサポートするメディアとか組織みたいなものが、すごくやっぱり少ないような気がしますね。

MY: ね、少ないよね。それから、お金がそこに行かないんだよね。

RM: そう、つかない、はい。予算がつかない。

MY: だから、本当、全部ボランティア。手弁当。自分のお金と自分の時間を使ってしかできないから、運動がなかなか育っていかないよね。みんな食べていけないといけなから。

RM: シェルターがものすごく減っていったるんですね。閉じていったるんですよ。少ないシェルターが、さらに閉じているというのは、やっぱり私たち世代がもう70代くらいになって、若い世代を雇うには絶対にお金をきちんと払えないとだめなんだけど、多くの団体がボランティアで支えられているんですね。それがすごくやっぱり問題だし、こういうことに私が窮とか言った時に、「自分で選んで結婚したんでしょ」って、「そういう女の人にはお金を出したくない」って女の人から言われる。で、まあ出す人は子どもに出す。「子どもには罪がないからね」と。でも、「自分で選んで結婚したんでしょうか？やっぱりDVの構造とか、選んでそんな暴力をふるう男と結婚しないですよ」って、「結婚してから豹変するというのが非常に

多いんですよ」とかね。「だから、妻であるから、妻というポジションにいる限り、暴力をふるったりするんですよ」って言うんだけど、なかなかそういうことを教育の場でなかなか言えない。

MY: 言えないし、理解されないんだよね。構造的な支配の構造がね。そこがわからなくて、個人的なことに、こう...[還元されて]。

RM: そう、彼女、彼女が結婚...。だから私、住宅のこともずいぶん言っていてるんですよ。住宅課にね。そしたら、「正井さん、ちょっと気の毒だけどね、自分たちの課の中では、自分で結婚して、勝手に離婚していて、なおかつ家賃補助をしてくれとか、タダで家を提供しろとは、虫がいいよなっていうのが、一般的な、この[課の]中での話なんだよなって。私にこっそりと教えてあげるね」という職員がいる。

MY: そうだね、だから、その人も何かおかしいとは感じてるけど、「じゃあ、おかしいから変えよう」とはいかないんだよね。だって、自分は痛くないから。自分の身には降り[かからない]、何の影響もないから、おかしいと思うけど、そのままにしちゃう。でも、そういうふうにしてそのままにするから、全然社会が変わらない。

RM: でも、なんかね、日本っていうのは一見、経済大国じゃないですか、すごーく。その中で女性の部分、もちろん、ほかの障害者もみんなそうなんだけど、人権の部分は本当に予算もつかないし...。その中でも、人権の中でも、例えば障害者の運動の中でも、障害を持つ女性の問題はものすごく本当に語られないんですよ。だから、どうしてこんなにも女性たちが声をあげないのか...。

あなたが構造と言われる。やっぱり、日本の女性の国会議員って10%ね。で、ワーストテンに入ってるんですよ。下の方の156カ国の144位って言ったら、下から10番目なんですよ。もう先進国でこんな国ないんですよ。ほとんど、中東の国々の間に日本もちょっと入ってるのね。だから、中絶の問題しかり、夫の許可がいるなんて、中絶に夫の許可がいるなんて言うのは、本当に世界で7カ国しかないというね。それも、中東の国々の中に日本が入ってる。インドネシアとか、それから中東、日本。なんかね、本当に女性の人権とか、そういうのに関わる、特に女性の暴力とかに関わる部分っていうのは、本当にこの国を変えたいと本当に強く思うんですけど...。

も。う負け...諦めないで続けているしか、私にできることは諦めないで言い続けて、諦めないで自分ができることを...。だって、あんまり大きく考えるとね、なんかもうめげちゃうんですよ。でも、めげずにやるには、自分にできることをとにかく継続するしかない。

私はやっぱり「理不尽だ」というのがずっとあって。なんで、あの...。私、ノルウェーの平等教育っていうのをね、ちょっと読んだんですね。小学生の。そしたら、男の子と女の子が髪型も一緒、ズボンはいて立って、「男の子と女の子の違いは、女の子が子どもを産む機能を持っている。それ以外に何の差もない」というふうに、最初にボーンと書かれてあるんですよ。うん、で、2番目には、女性の歴史ね。女性がいかに権力を奪われていったかという歴史が、ノルウェーの歴史だけじゃなくて、フランスのギロチンで女の人が、世界人権宣言か何かの時に女の人が、「自分も女性の人権を」と言ったら、首切られちゃったというギロチンの[話が]あったとかね。イギリスの参政権運動で参政権を求めた女たちが凄いい弾圧されたとか、そういう女性史を、ヨーロッパの女性史を子どもに教えてるんですよ。



で、3つ目が暴力だと。必ずそのジェンダーと暴力が付いているので、暴力は決してどんな場合も暴力以外の話し合うという方法があるって。その3つを軸にノルウェーの子どものジェンダー平等教育っていう本を読んだ時に、私はこれをどうやったら日本でできるんだろうって考えてるんですけどね。うーん、何かジェンダー平等な社会にならない限り、私は災害時にも、どんな場面でも、女性がすごいひどい状況に置かれるっていうのは、それこそ、「(災害は、) 防災は平時から」っていうのも言ってるのが、防災はやっぱりジェンダー平等社会を作らない限り...。防災関係の女性が集まると、みんな「変わらないね」っていうんですよ。その女性の現状が。で、どうしてだろうって言ったら、みんな「平時に日本にジェンダー平等がないから。ジェンダーの。これだけ平等な社会である限り、そこを変えない限りは変わらないよね」って、まあ、ぼやいているんですけどね。

MY: うん。ジェンダー平等の大切さをずっと話してきたんだけど、このプロジェクトの大きなタイトルがグローバル・フェミニズムズ・プロジェクトじゃない? ...世界のグローバルのフェミニズム「ズ」なのよね。複数形なのよね。

RM: そう、複数形なのね。

MY: 正井さんにとって、フェミニズムって、どういう意味がありますか。ちょっと堅い話だから柔らかくしてもいいんだけどさ。

RM: 私はやっぱりね、原点はフェミニズムっていうのは、女性が尊重...。私、本当に女性として、女性というか人として、尊重してくれるというね...。私、男性に、不幸にして、父・兄・夫という風に、「黙れ!」と言うタイプに出会ってきてしまっているの、人として尊重されるということ、女性の尊厳が守られて当たり前。フェミニズムというのは女性解放だよね。女性解放って、女性がどんな風に解放されるかって言ったら、やっぱり女性がひとりの人間として、ちゃんと尊厳を持って扱われるというか。それが当たり前。それは当たり前のことなんですよ、私にとってはね。で、どうしてね...

MY: そうですよ。特別なことじゃないんだよね。

RM: 全然、特別なことを要求している[わけではない]。当たり前なんですよね。で、私、この前、公務員さんの課長クラスの男性ばかりに、「女らしさ・男らしさ」でちょっとワーク[シヨップ]をやってみましょうって言って。そしたら、「男女平等はできてる」っていうんですよ。行政に行くと。「あなたの言う女性差別なんてもうない。男女は平等だ、もう平等だよね」って言うてる中で、じゃあ、「あなたが思ってるんじゃない、日本という国の中で、女性はこうあるべきとか、何かそういうので、あなたが思うことは何かないですか?」って言ったら、「女は前に出るな」「だよね、だよね、だよね!」って周りが全部言った。「女は前に出るな」。その「女は前に出るな」っていうのは、ものすごく根幹だと思いませんか。「女が前に出るな」ということは、女の人はいそれこそ政治家にもなれないし、社長にもなれないし、部長にもなれないし。

本当に、えっと、今回、兵庫県の知事選があって、私、質問状をね、うちの団体で出したんです。で、一つの項目が「女性を3割にしろ」というのがありますが、今、部長級は10人中1人しか、たった1人しか女性の部長がないので、兵庫県は。で、「それについてどう思われますか」って質問を書いたら、「僕は性別ではなく、能力別に人の人事を考えたいと思いま

す」と言う返事が来たのね。で、それってよく言われるんですよ。「僕は性別でしません。能力別。でも、そしたら、職員が10人いて、たった1人しか女性は部長になれない。女性と男性の能力の差は、何か1/10しか女性は偉い人がいないのかと思う。構造を、全然構造として、この人は理解していないと、あの今の知事に対して私は思ったんですけどね。でも、そういう人が圧倒的に支配層に多いんですよ。私は、やっぱり女性が本当に尊厳を守られる、女性が本当に…。まあ、私達、ずっと昔に「女性は暴力なしに生きたい」って、そういうシンポジウムをしたんだけど。

MY: この当たり前の事がどうしてこんなに難しいんだろう。ね。

RM: やっぱりね。でも、これをどうしたら変えられるかな[と]、よく私たちが話するのは、やっぱり「教育しかない」と。よく台湾が、この頃は、私たちの中で台湾が例に出る。台湾はジェンダー指数がアジアでトップで、世界で今6位のはずなんです。それは2004年からジェンダー平等教育法という法律ができて、一年間にとにかくジェンダー平等教育を8時間かな、幼稚園から高校を卒業するまでの義務教育の期間に、職員も生徒も全員がそのジェンダー平等教育でジェンダー平等について8時間、性教育を4時間、それからDVを4時間。その3つの教育をずっと受けなくてはいけない。それは義務教育なんですって。それをやることで、その2004年当時は日本よりも男女の格差がひどかった台湾が今そこまで変わった。2004年だから、まだね、21年ということだね。

MY: 7年か。

RM: それぐらいで変わったって、やっぱり、教育だと思うんですけど、ジェンダー平等教育が日本では、教育をやるという法律そのものがなかなかできないし、性暴力禁止法もできないし。

MY: あの、だって、夫婦別姓も。

RM: うん、通らない。だから、あの夫婦別姓も、名前を失うということはものすごく大きいことだというのが、よく物語なんかで、名前を失うと、その人、人間として失われるというような童話みたいな、ファンタジーの世界でよくあるよね。名前を失うの。それなのに、夫婦別姓を、まあ言ったら、「強制してない」というけど、90何パーセント夫の姓になるということは、ほぼ強制ですよ。夫婦別姓をしている国って、確かもう今、日本だけじゃないかと言われているの。私、そこまでその専門じゃないけど、ほとんど無いんですよ。だから、日本ってそういう風に、なんか特殊に女の人だけが、ずっと、そういうところにとどめ置かれている国なんですよ。

MY: そうだね。なんか、これでもかこれでもかって言って、押さえつける社会の力が、もう至るところにある。そして、それを正当化する議論がさあ、家族幻想なんだよね。ね、夫婦別姓にすると家族が崩壊するとかさ。もう、全然…。崩壊してるところは崩壊してるし。だけど、そういう幻想とか、自分たちの理想論みたいに押し付けて。で、守ろうとしているもの。すごい強すぎて…。本当に当たり前のことだね。女性が、男性もけどね。すべての人間が尊厳を持って生きる社会。当たり前のことなのに。

RM: あたりまえなんですよ。だから、私、当たり前前の方がなぜ通らないのかっていうのが、他の人がすごく不思議。怒ったり、理不尽だと言わないことのほうが私は不思議で。私、特別なことを言ってる訳じゃなくて、女性の地位向上とか、あんまり女性の人権とかいう風な言い方になって、あの当たり前前にあの男の人、女の人が尊厳を持って生きるとは、人間として当たり前前を私は要求してるんだけど、そうでない分野の仕事をやっぱりしてるので、あの...ねえ。私、本当にずっと何でこんな長く続けているかって言ったら、やっぱり私が現場を持っているからだ、いつも思うのね。そういう人たちから出た言葉っていう、その当事者から出た言葉の中に、ものすごく重たい言葉が。彼女たち語りますよね。その人の体験の中から、言ったら魂の声みたいなのが。やっぱり、それを聞くことで、私は続けてきているようなところがありますよね。

MY: そうだよね。だって真実ついてるんだもんね。本当のことを自分の言葉で話すから。すごいんだよね。

RM: なんかね、よくシングルマザーの人とね、私、その後の支援というのは、やはりシングルマザーの支援になることが多いんだけど、彼女たちが「正井さん、私たちって暴力か貧困しか選べないんですか」って、本当にそれを聞いた時に、「本当だね」って。日本は結婚という所から出て行っちゃった人はものすごい貧困になって、それは女性だけじゃなくて、即子どもの貧困につながるし、教育格差や健康の格差や経験がものすごい少ない経験の格差。で、ほとんど夢を持ってないでいる。「子どもが大事だ。少子化だ。だから、子ども産む。それに、お金を、予算をつけろ」って、言ってますよね。不妊治療にもものすごい予算を今回もつけた。1番についた。でも、今生きてる子どもがすごい貧困で苦しんでいる。で、それはお母さんも貧困。そうすると親子関係も崩れてくるし、もうお母さんも疲れちゃって、何度も子どもの首を絞めてしまうっていうね。あまりの...。「私は働いて息して寝る。働いて息をして寝るの毎日です」って言われた人がいて。で、夜中に子どもが自分の身体を触りまくる。6畳1間でずっと、その5歳の子どもとずっと何年も暮らしているけれども、こう、何か、首をもう時々締めてしまうと言うのね。子どもがわーっと来ると。「もう...ああ、そうか」って。で、2DKに移れた時に「夢のような生活になった」って私に言ったのね。もう、これが、日本の現状なのかって。そういうのでね、時々また怒って、またなんとかそういう事が変えられるといいなと思いつつ、わずかな希望を持っている。

MY: あの、じゃ、さあ。もうそろそろ時間が迫ってきたけれど、日本の運動に何が足りない？これから。

RM: やっぱり、本当は連帯すべきだと思って。ずっと言ってるでしょ、私。。点と点にいる女の人たちが、線になって面になって、やっぱりつながっていかないと変えられない。ええ、そこが、そういう繋がるってことがなかなか難しいのが...。それと、女の人たちがあまり政治的にならない。私はやっぱり自分が選挙にも2回も出たような人で、「女性を議会へ」って、そういうバックアップスクールも作って。やっぱり、こう、「男女共同参画センターで、『男女平等男女平等』って、『意識改革』ってやっても、社会の制度とかシステムがやっぱり変わらない限り、1人の意識変革しても...

「僕と君で、対等な関係をつくっていこう」って学生たちは言うんだけど、でも、賃金格差というのが厳然と男女の賃金格差がある限り、何かあったら仕事を辞めるのは女の人だし、やっぱり賃金の高い方が賃金の少ない人を支配する構造というのは、やっぱり経済社会ではどうし

でも起こりますよね。だから、やっぱり、その制度や法律を変えていくっていうことを、女の人もどうしたらそれを変えられるんだろうとかいうことを、一緒に考えて動けるようになったらいいなって。何か、3割の人が動くと社会変わるって言われてますよね。だから、3割でいいから、繋がって、変えようというね、ネットワークみたいな。うーん、でも、全然あれ以来、2011年からずっと言ってるんだけど。

MY: 言ってるよね。あの時も、正井さん、ゆるやかなつながり、ギチギチにならなくていいから。

RM: ゆるやかににネットワーク。でも、何だろう。日本の女の人は分断…。それも見事に男の人たちがなんだか上手に分断をしてるんかねと思うぐらい。何なんでしょう。

MY: 分断して統治するよね。

RM: ただね、希望は、フラワーデモって、日本で今すごい、やっとフラワーデモが…。日本で Me Too 運動もあんまりないのかなと思ってたんだけど、フラワーデモはね、でも、たったひとりで立ってるんですよ。それは、本当に、あの、すごいね、子どもに性暴力したり、お酒を飲まして性暴力しても全員が無罪になる事件が4件も続いた時に、女の人がやっぱり立ち上がって、やっぱり性暴力をね、日本の女の人は高い割合で受けてると思うんだけど、その調査もあんまりないんですよ。実態調査みたいのが、あんまりね。で、そういうことで、やっぱり、もう黙ってないという人たちが奈良で1人立ち上がりましたとか。青森で4人で立ってますとかね。本当に少数の女の人が…。群馬とか、前橋で、今、3人立ってますとかね。私、それはちょっと感動もので、女の人達が、しかも若い人たちが立っているってすごい、変わるかもしれないという思いを、私は持っています。若い人たちが今、立ち上がりつつあるような。やっぱり、だからそれを信じたいですね。変わるんじゃないかねっていう。

MY: そうだね。うん。そしてバトンタッチ。それまで頑張ろう。うん。最後に、世界の皆さんに。女性フェミニストの研究者だったり、運動をしている人とか、学生に何を伝えたいですか？

RM: やっぱり、今回の私たちの災害時の性暴力が、やっぱり調査ということが、私はね、そういう分野の人じゃないので、現場の人間にとって、調査をして、それをちゃんと報告をあげたことがこれほどまでに男社会の中で有効性を発揮するというのは、やっぱり驚きだったんですね。で、アメリカはずいぶん、いわゆる、研究者が70年代ぐらいかな、いわゆるNPOの中にずいぶん入って行って、そこで出来上がったことから調査をして、研究して、それを提言して行ったと私は聞いているので。日本では、まだなかなか研究者がNPOの中に来て、一緒に活動をする中でそういうことを提言して行くっていうことは、やっぱり少ないように思うので、そういうことが日本の中でもどんどん行われていくと、いいかなと。だって、これも吉浜さん、海外の吉浜さんが来てくれたでしょ。日本で「これをやりましょう」って言ってくれる人はいなかったんですよ。

MY: そうだね。でも、やっぱり私、海外から来たから、「これやりましょう」って言うと、「いや、日本ではできません」とか、「吉浜さんはアメリカかぶれしてるから、日本のことがわからないから」とかさ、やっぱりそういう批判は結構あるよね。だから、それはしょうがないと、やれること…

RM: やれること、そう。

MY: ...やって、結果を出していく、ね。もうひと頑張りしますか、ね？

RM: そうですね。でも、やっぱり海外の動きって、やっぱり私、今メディアの人にね、海外の情報で日本の女性にプラスになることは、やっぱり伝えてほしいとか、まあ言ってるんですけどね。やっぱり、そういう情報が、例えば、そのスマトラ沖とかハリケーン・カトリーナのとときの情報とかが入ってくることで、「あ、やっぱり、そういうことがあるんだ」とか、やっぱり勇気づけられるということは、私にの中では、はっきりあったので。ただ、そういう情報が非常に入手しにくいというかね。そのネットワークみたいなものが、学者の中ではきっとあるんですよね。NPOの中に、そういう情報みたいなものは、なかなか来にくいということがありますけどね。

MY: なるほどねー。そうだよ。言葉の壁もあるからね。

RM: 言葉の壁ですね。でも、まあ、本当にやれることを、ぼちぼち。

MY: うん、やるか。でも、何か、今日、いろいろヒントを得ました。もうひと頑張りしましょう。そして、また一緒に、何か。

RM: そうですね。本当によかったです。あの調査は大きかったです。感謝してます。

MY: こちらこそ。じゃ、また。これからもよろしくお願いします。

RM: ありがとうございます。はい、よろしくお願いします。

MY: じゃ、失礼します。

RM: さよなら。